

2018 合同教育研究全道大会

第20分科会 「障害児・障害者の教育と福祉」 2日目分散会

(共同研究者：村田 修 二通 諭 小淵 隆司)

(司会者：武藤 素子 北島 朋子)

第20分科会では、提出されたレポートを3つのグループに分けて、グループごとに討論を行った。本グループでは、特別支援学級、通級指導教室、特別支援学校の教員のレポートについて、共同研究者のご意見をいただきながら、充実した討論を進めることができた。はじめに、小学校の特別支援学級のY先生から、暴力的な行動が目立っていたRくんについて、信頼関係を作り、その行動を変えるに至った実践の発表があった。中学年頃からキレたり暴れたりすることが多くなってきたRくんの対応について校内で協議し、安易に力で暴れを押しさえつけず、他の学年の児童と一緒に学べる教科を作り、やるべきことはやる、暴れてしまったら謝罪や後片付けをできるようにする、実態に応じた学習内容にするという点を確認し、実践を行った。Y先生は、Rくんの好きなことを授業に取り入れて、気持ちに寄り添いながら、友達と楽しく学べる環境の工夫をしたり、褒め

られる場を用意したりすることで、何かをやり遂げて授業時間を過ごした満足感が得られるようになり、落ち着いて過ごす時間が増えたとのことだった。共同研究者の小淵先生から、暴れる行動について「できないことを自分でもわかっていて、まわりの目も感じている。他の子の、Rくんに対する理解、認識が変わるような出番が大切。常動の調整が必要」とのお話があった。

2本目のレポートでは、小学校のE先生から、はじめての通級指導教室でのとり組みについて発表があった。11名の子どもたちが通級指導教室に通う中で、個々に応じた教材や手立てを細やかに工夫し、子どもたちはやる気や自信がUPして、家庭でもよい声かけができ、楽しそうに教室に通うようになったとの実践報告だった。課題としては、それぞれの子どもの目安の時数が学年や教科によって入れにくい点、限られた時間を有効に活用するために、事前準備にかなりの時間を要する点が挙げられた。子どもたちは、自分の得意なことや苦手なことに気づき、一つ一つ丁寧に取り組むことで大きな成果が表れてきており、『「わかることは楽しい」と実感できる通級指導教室をこれからも目指していきたい』との思いで締めくくられた。

3本目のレポートは、通級指導教室に通うAさんの困り感の捉え方と、どのような支援を求めているのかについて、実践の発表があった。感覚過敏があり、認知のアンバランスが見られるため、通級では、ことば遊びのゲームなど、好きな

ことを取り入れることで相手の目を見て話をするができるようになり、会話が続くようになった。また、感覚過敏に配慮した対応（裸足にハーフパンツ）や、トランポリンや馬跳びなど足裏に圧力がかかる運動を多く取り入れたことで、その後の机上での学習に落ち着いて取り組むことが多くなった。Aさんにとって、通級で個別指導を続けていくことで着実に分かることが増えていくが、学級での学力競争についていけなくなるのではないか、との相談だった。共同研究者の小淵先生は、通級は個ではなく、学級の子どもとつながっている。学力、勉強だけで生きているわけではない。学校の生活全体をどうコーディネートしていくか、自分で気づいて解決の方向性を見つけていくことが大事、その子の活躍の場を作っていくことが大切とのお話があった。

4 本目は、定年を間近に控えた特別支援学校の K 先生からのレポートで、小学校の特別支援学級で教員と1対1で学んできた A くんが、初めての特別支援学校中学部の集団の中で、他の生徒からの接触や日常的に聞こえてくる大声、世話好きな女子の指示や促しの中で内心戸惑いながらも「社会」というものを学び、自分の意思を K 先生に伝えるようになり、成長していく実践の発表だった。最後に、今までの経験から K 先生が感じたことを述べられていた。「教科指導が難しい段階の生徒に対して、ややもすれば「共に過ごす」ことのみで終わってしまったり、あるいは反対に「やらせる」ことが多くなってしまいがちだ。「やらさ

れる」という状況は意思を封じ込め、自らの考えで行動する力を奪いかねない。

自分から言葉を発信できなくても「自分の意思で行動したい」という気持ちを尊重し、行動や表情からメッセージを受け止め、心の成長に少しでも寄与できるように関わっていきたい」。

最後に、特別支援学校のS先生の、小学部Eくんの実践についてレポート発表があった。

「心の根っこをたくましく～自我をはぐくむ～」というテーマで、ダウン症のEくんへの丁寧な実践記録と発達の捉え方等について、熱い議論が行われた。自我の育ちにおける過程での「ただこね」をどう捉えるかによって、教師の関わり方や子どもの行動が変わってくるという課題について意見を交換した。最後に、共同研究者の二通先生から、集団作りで目指すものとして、ひとつは「自分の意見を出せる子ども」、そして「他者の意見もバックアップできる」という、公共的な感性に至る子どもを育てることが大切だというお話があった。また、「特別支援学級を利用している（在籍している）子どもの数が異常に増えている。多すぎる。調査したわけではないが、学力テスト実施と同時期なのではないかという印象がある」という点と、小淵先生からの「子ども個人にフォーカスが当たりがちだが、集団としての姿が見えてこない。いろいろな形態のグループ、仲間実践を行っていくこと、学校、学級のほかの児童とのかかわりの中でこういった動き

があるのか、通常学級の集団にどう捉えさせるのか、どうなげかけるのか」というお話が印象的だった。

朝9時半から始まった分科会は、休憩をはさんで終了の2時半まで活発な意見交換の場となり、貴重な実践やアドバイスに触れることができた。(文責:北島)

『忘れられない3年間』【村井みすず先生】

○利尻中学校の女子生徒（明るくて人懐っこい子）【以後 Y ちゃん】

⇒小学校時から支援を要する子であった（小学3年生まではおしめをしていた）。

☆宿題をやってこないことが続いた。

ある日、初めは「やってきた」と言っていたが、宿題を見る時になるとやっていないことが分かった。「どうしてやっていないの？」と聞くと黙ってしまった。「訳を言うまで待つね」と村井先生は言い、いろいろと環境変えてみたが、3時間状況は変わらなかった。そこで、教師はその場を離れ、職員室に行った。そうすると、Y ちゃんが職員室まで来て「TV を見ていた…」と言った。「村井先生に見捨てられる」と Y ちゃんは感じたようだった。この出来事をきっかけに村井先生は「愛情をかけていかななくてはいけない」と感じた。

※母は知的障害があり、手元にあるお金はすぐに自分の嗜好品に使ってしまう…。そのため、Y ちゃん洋服代に使われることはなかった。

村井先生は Y ちゃんに「気持ち良い・気持ち悪い（環境）を身につけてほしい」と考え、自立活動でファッションショーと称して色々な服を着てみたり、ファッション雑誌を読んだりした。

⇒2年目の修学旅行直前に「きれいな格好をしたい」と Y ちゃんが言った。そこで、一緒に買い物に行った。

この出来事をきっかけに、「掃除をしたい・机を作りたい（机がほしい）」と自分から言うようになった。

☆進路は美深高等養護学校の家政科に進んだ。

⇒村井先生は「教師以上に親のように接した」と感じた。

☆特別支援の生徒は「特別な配慮や支援を要する生徒なのではなく、支援を要するだけで普通学級の変わらない」と考えている。

【質問等】

質問：なぜ、村井先生が Y ちゃんを高等養護学校に行かせたいと考えたのか？

⇒1年生の終わりから、Y ちゃんの父親に「手に職をつけさせたい」と言われていた。自立させるための訓練をさせたいと考えていたから。

質問：外部機関との連携はどの程度とれていたのか？

⇒町の保健福祉課の方と連携はとっていた。保健福祉課は家庭の支援（家庭環境のアドバイス）、学校は生徒の支援を行った。保健福祉課の方には父親が在宅している時に行ってもらい、家庭環境を改めてもらえるようにした（現在でも続いている）。

分科会 20 第3グループ

質問：排泄面の変化はどうか？

⇒「きれいになりたい」と思ってからは、トイレに行って排泄するようになった。
(それまでは、尿意や便意を感じたら、すぐにしていた)

質問：小学校からの引き継ぎの関係

⇒小学校の引き継ぎからは「衛生面大丈夫！」と言われていたが…。

質問：緘黙については？

⇒焦った（見捨てられた）のだと思う。その後、黙っている時間は短くなった。
この出来事がきっかけで教師も変わった。

質問：ネグレクト的なものはあったのか？

⇒ネグレクトはなかった（食事は十分）。

質問：便を漏らした時の背景は？

⇒（今考えてみると）お風呂に入っていなかった時期と重なっていたと思う。

質問：何か心理的な変化はあったか？

⇒大泣きして以降、教師に確認することが多くなった。

質問：（答辞の文章で気になったことで）集団での様子はどうだったのか？

⇒全校生徒が13名。同学年が1名（男子）。兄が1学年上。女子生徒2名。
皆がYちゃんのことを理解して接してくれている。

感想：小学校ではマンツーマン、中学校では環境が変わることが多くある。

小学校勤務として気を付けていかななくてはいけないと感じた。また「清潔感、ファッションショー」を通して「こうなりたい」と感じさせた村井先生はすごいと思う。

【共同研究者から】

渡邊先生：Yさんとの関係性からお互いに変化できたことを感じた。「感情」だけではなく「子どもにたいせつなもの」を与えたのだと思う。

小野川先生：「失敗を不快に思っていない」というところから「快の快感を持ってほしい」としたのは良かったと思う。自分も寄宿舍指導員の時に同じようなことを行った（いろいろなパンツをはかせてみた）。現在行っている調査で、寄宿舍に入っている生徒は、いろいろな経験を通して「したいことが増えている」ことが分かってきた。

戸田先生：「日常」の中で「片付ける」や「親子の関係」をイメージできていなかったのだと思う。

『安心できる場所はどこ？』

【塩谷弘子（佐藤ひとみ）先生】

○対象となる児童：情緒障害の男児（ADHD 傾向で「モノを振り回す、モノをなくす、偏食である。また、お話しすることは大好き」）

○母子家庭。過去に両親の離婚時に壮絶な体験をした。

※母親は 40 歳代後半。物の管理は苦手、感情の起伏が激しい。

○男児への母親の願い：どんなに暴れて（パニックで）も、行事には参加してほしい！

ある日、友達とケンカしてしまい、行事に参加できなかった。

⇒わが子が行事に参加していなかったため、母親は怒って帰ってしまった。

⇒その後 2 週間は一切の学校との連絡を絶った。

⇒2 週間後学校で話すことになった。この中で「学校と保護者が同じ方向を向いて協力していこう」と協力することを確認した。

○秋頃から、パニックの幅が広がった…。毎時間パニックになるようになった。

○3 年生を機に、支援体制を整えるようにした。また、同級生の女兒からお手紙をもらって、教室に来られるようになった。教室では、ポストカード描きを行っていた。

○4 年生から母親は協力的になった。

○その一方で、2 学期の頃から男児は母親や祖母の財布からお金を勝手に盗み取り、おもちゃ屋で、カードゲームのカードを買っていた。

⇒母親に叱られる。

⇒その後も盗みを繰り返した…。

⇒児童相談所の職員から「今後も繰り返すのであれば病気だから、精神科に通院（入院）しなくてはいけなくなるかもしれない」ことを伝えた。

⇒その後（現在）は、盗みは止まっている。

【フロアへの質問】

母親は孤立している。母親が生きづらさを持っていて、子育ての生きづらさを持っている（男児にも影響が出ている）。どのように支援したら良いか？

【質問等】

質問：精神科医からの受診等

⇒男児は 1 回（脳波をとった）。（教師の希望としては、）母親にもつながってほしい。

母親につながってほしい理由としては、記憶がないことがあったり、男児を叱っ
てもうまく伝わっていなかったりすることがあるため。男児曰く、叱っている内容が回りくどくて伝わらないようである。

そして、男児がパニックになった時に「お母さんに〜〜~された」と言う。母

分科会 20 第3グループ

親曰く、「家庭では暴れない」ようである。

○母子分離も考えたが、母子分離をしても良い結果になるとは思えなくて…。

母親は正職員として働いている。福祉との関わりは無いようである。

質問：落ち着いている時に、家庭での話はするのか？

⇒「休みの日に〇〇に行ったよ」と話すことがある。

⇒母子関係は良いと思う、男児は母親のことが好きなのだと思う。

意見：がんばりやなお母さんだから、医療ではなく、福祉につなげるべきだと考える。

学校からの連絡は、男児の行動ではなく「家でのイライラについて」聞いてあげると良いと思う。

◎大切なことは、家庭支援の重要性

【要保護児童対策地域協議会やスクールソーシャルワーカー、などと横のチームを組むこと】

○母親は変わってきている。「私が怒った日は暴れるかもしれない」と言っている。

⇒ただ、どうしたらよいかがまだ分からない様子。

質問：「漢字テストの時に暴れてしまう」という実態があったが、その時の対応は？

⇒男児が他の人の言動を深読みしてしまい、勘違いをしていることが多い。

対策案 そのケンカしてしまう児童同士の感情をつなげると良いと思う（気持ちを代弁してあげたり、一緒に謝ったりする。そうすると、相手の気持ちを理解できるようになるかもしれない）。

質問：集団ではどのような様子なのか？

⇒31人の集団にいとドロップアウトしてしまう。中集団（8人程度）だと、何とか活動できている。この集団活動で「他者理解の学習」ができるようになってきている。

【共同研究者から】

小野川先生：（虐待）体験があったとしたら、「買い物への依存」が回避行動なのかもしれない。（虐待）体験へのアプローチは長期間（一生をかけて）支援していくことが必要だと考える。そのためにも、「安全・安心の確保」を小学生の間は行うことが大切であると考えます。

戸田先生：小野川先生もおっしゃっていたように、長期間の取り組みが必要になってくると考える（小学校→社会）。行動とは別に、思考・心理の変化についても考えていくことが必要だと思う。現象を先送りにしないように心掛ける。

渡邊先生：学校での役割分担を明確にしていくと良いと考える。

『学芸会に出られたね…圭人が学校をかえる』

【西野誠（童唐学）先生】

- 圭人は4～6年生の学級に入った。しかし、関わろうとしなかった。
（3年生時は72日欠席）⇒周囲の先生方からは「来られたら良い」と言われていた。
- 理科・社会・書写だけは、学習支援員の女の先生が教える（昨年度までの圭人を知っている人に指導してもらいたかったから）。
- 母親（家庭）では、大切に扱われている（父親は圭人の出生時に離婚しているので、圭人は知らない）。おじいちゃんの関わり方が愛着障害に影響しているかも…。
⇒おじいちゃんとの会話が変わると当児の様子が変わる。
- 行事では「あなたがいないと困る！」と伝えるようにした（教職員で共通ワードにもらった）。
- 他の児童が圭人の意見を聞いている様子を見て「わがまま」だと感じたようだった。
⇒そのようなことが無いように、他の児童の要求も聞くようにした。
- 学習発表会：圭人は顔が見えなることを嫌がったので、黒子役になってもらった。
（黒子だったが、とても目立っていた）
⇒このような経験を通して、落ち着いてきた。
- 学習をスモールステップにした。
- ①圭人くんと話す時間
- ②まわり将棋やオリジナル将棋（経験を通して、時間の見通しを持てるようになった）
- ③ものづくり（美術が得意な教頭先生といろいろなものを作っている“似た者通し”）

【質問等】

- 質問：学校内でどのように情報を共有しているのか？
⇒圭人に早く情報を伝えてしまうといろいろな準備をしてしまうので、そうしないようにしている。
- 質問：他の児童の要望をどのように聞いているのか？
⇒6年生が鬼ごっこをしたと言うと、1年生も鬼ごっこをしたいと言う。
要望の多くは学習の要望ではなく「学校生活上の要望」

【共同研究者から】

- 渡邊先生：小規模校だからこそ、可能になっていると思う。他の先生との関係性は大切だと思う。おじいちゃんとの関係性も圭人くんの成長で重要になってくると思う。
- 戸田先生：縛りが強いので、共有は難しいと思いますが、今後もできたら良いと思います。
- 小野川先生：1人に丁寧に接することができる先生は、30人にも丁寧に接することができる。逆も然り…。周りの先生に見習ってほしい。